



【人が守るべき神の始めの戒め: 父と母を敬え!】
今日の聖書本文: 出20:12, エペソ6章1-3節/暗唱聖句; 申命記5:16

説教者: 鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!

今日は母の日を迎えて感謝主日として礼拝をささげる日です。ユダヤ人の知恵の書と言われるタルムードには次のようなことが書かれています。神様は“私の代わりにあなたの母を送り出したのだ。私には背中がないので母を送って子供たちを背負わせたのだ。私には胸がないので母の胸で子供たちを抱かせた。私には命の乳腺（にゅうせん）がないため母を送り出して命の乳腺で子供たちを養ったのだ。私にはあたたかい手で守られないため母を送って彼らを育てたのだ。”つまり神様は神様の代理者として、愛の御手である母を送って私たちを養われたということです。

もう私自身もすでに5人の子供の親になり、大人になり、父親にもなりましたがけれども、母の前ではいつまでも子供であり、母はいつまでもたよりになる大きい岩みたいな存在であることをさらに気づいています。今日、特にこの礼拝に参加されている母なるみなさんはそのような尊い存在です。神様が特別に母方（ははがた）のうえにいつも健康と天からの慰めと平安がありますように主イエスキリストの御名によって祝福します。

愛するみなさん、キリスト教のほどに親を大事にし、親孝行を強調しているところはありません。

母の日の由来も実はキリスト教会から始まったことを御存知ですか。17世紀の時代、イギリスでは、教会の復活祭（イースター）40日前の日曜日を「Mothering Sunday」と決め、主人が使用人を里に帰らせる日としたのが始まりです。その日になると、家から離れて仕事をしている人たちを実家に里帰り（さとがえり）して母親と過ごすことが許されていました。このとき贈り物として、「Mothering cake」（お母さんのケーキ）というお菓子を用意したそうです。

アメリカでは1900年代のヴァージニア州からが母の日の起源といわれています。1905年5月9日、アンナ・ジャービスという人の母親が亡くなりました。やがて彼女は、「亡き母を追悼（ついでう）したい」という思いから、1908年5月10日、フィラデルフィアの教会で白いカーネーションを配りました。これがアメリカで初めて行われた母の日だそうです。この風習がアメリカのほとんどの州に広まりました。そして1914年、その時のアメリカ大統領だったウィルソンが5月の第二日曜日を母の日と制定しました。

日本ではどう始まったのか御存知ですか。日本で初めての母の日を祝う行事が行われたのは明治の末期頃で、1915年（大正（たいしょう）4年）に教会で祝われ始め、徐々に一般に広まっていったと伝えられています。昭和に入ると3月6日を母の日としていました。この日は当時の皇后（こうごう）の誕生日であったそうです。現在のようになったのは、戦後しばらくしてからだとされています。また、一般に広く知れ渡ったのは1937年（昭和12年）森永製菓（もりながせい）が告知（こくち）を始めたことをきっかけにするとも言われます。

聖書の申命記21章18-21節では“かたくなで、逆らう子がおおり、父の言う事も、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、その父と母は、彼を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、町の長老たちに、「私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです。」と言いなさい。町の人はみな、彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。あなたがたのうちから悪を除く去りなさい。イスラエルはみな、聞いて恐れるために。”と書かれています。

16世紀プランの改革者だったカルヴィン先生は聖書が教えて下さる親孝行についてこう言われました。

“我々は神様のすべてが理解できなくてまるで矛盾のように見える時がありますが、神の御国に上って行くとするべし。それが理解できるようになるでしょう。ただはっきりと言えるのは、親孝行をしなかったのに長生きするのは生きるその自体が神様からの罰であることを覚えなければなりません。”これほど、聖書では親を敬うこと、親に従うことを大事に教えて下さっています。

しかし、残念ながら、今生きている私たちの時代の人々はみんな聖書の神の命令に熱心に従っているようには見えません。実はその年をおいた老人の方々が私たちの親の方々ではありませんか。しかし、高齢化によって年を寄った親がふえたのにもかかわらず、社会と子供たちや若者たちはその親を敬ってちゃんと面倒をみるどころか、むしろ不道徳的な問題が急増することをみると本当にこの世の終わりが近づいてきているような気がします。

高齢の親をその子供が虐待する犯罪率が2007年日本で最初発表され始めました。日本厚生労働省によると、2006年日本で発生された高齢者虐待事件は家庭で1万2575件、施設で53件、合計1万2628件でした。それともその以来ますます高齢の親を虐待する事件が急増されています。

その統計によりますと、大変残念なのは家庭で発生された高齢者虐待事件の大体の被害者は女性、つまりお母さんたちが77%を占めています。加害者たちは見知らぬ人ではなく、その母たちが一生涯育てたり、仕えて来てた息子や

旦那たちが半分以上を占め、特に、息子が37%として一番加害者数値が高かったし、その次は主人(14%)と娘(14%)の順番でした。虐待の種類も‘力がなく年を老いた親に犯す身体的虐待’が64%で一番高かったし、その次は‘心理的虐待’ (36%), ‘介護放置’ (29%), ‘財産強奪などの経済的虐待’ (27%)があったと調査されました。

これらの問題のため日本政府は何年か前から‘高齢者虐待防止法(こうれいしやぎやくたいぼうしほう)’を実施し、年を老いた親たちを守るための装置を法的に作ったのも残念なことなのに、それにもかかわらず、人間としての倫理を越えた犯罪が多様に起こされているのがいまの実情(じつじょう)です。年を老いた親との問題以外にも、最近はお小遣いをくれないという理由で中年の親を暴行したり、おばあちゃんがしかるといことで孫がおばあさんを殺害したり、病気の父をなぐったり、財産をねらって親を殺害したり、病気になった親を捨てるなど、口に出せるのも恐ろしい犯罪が犯されています。きっとここで集っているみなさんは自分の子供は将来決してそうしないと自分はそうならないと信じ込んでいらっしゃると思いますが、この御言葉を通してなぜ子供たちに親を敬わなければならないのか、親に従う事にどんな神様の祝福を頂けるのかを常に教えなければうちらの子供たちもこの世の間違った流れに流されてしまうかも知れません。

<1. 人に対する始めの神の戒め>

愛するみなさん! 旧約の聖書の神様の命令がまとめられている物が十戒だと言えるでしょう。その十戒は二つの石の板に分けて神様がモーセに渡してくださいました。一つ目の石の板には第一戒めから第四まで、二つ目の石の板には第五から第十まで書かれていました。一つ目の石の板に記録された一から四までの戒めは神様との関係において人間が守るべき戒めが、二つ目の石の板に書かれている五から十までの戒めは神様が創造された人間と人間の間において守るべき戒め(つまり倫理)が記録されています。ですから、神様から与えられた十戒の中で第五番目の戒めである“親を敬いなさい”という戒めは人として第一に守るべき神様の命令であり、責任であることを言われています。神を信じる人であっても、そうじゃない人たちであっても、神によって造られた者はすべてまず、一番あなたの親を敬うこと、従うことを命令して下さっているのです。

歴史の中で今の時代に等しいほど早く、社会的変化を経験した時代があったとしたら、それは歴史の中1世紀のローマ帝国時代でした。1世紀ローマ帝国が全世界を征服することにより、もたらしたいわゆる開放的なローマ文化、そしてローマの植民地文化は当時の伝統的倫理から人々を解放させるように見えたが、これによって大切な家庭が崩壊し始まる原因となりました。このような時代に使徒パウロは小アジアで一番ローマ的な都市だった今日のトルコにあるエペソでイエスキリストを信じてクリスチャンになって、たてられたエペソ教会に向かって何よりも、崩されて行く家庭を改めてたたせるべきだと強調し、教えて下さいました。

特に今日のエペソ人への手紙6章でパウロは親へのクリスチャンの責任を強調しながらこれが人が守るべき約束のある第一の戒めであり、家庭を改めて立たせるための始まりであり、家庭が小さな天国のように幸いになるための秘訣と約束でことを教えて下さいました。親を敬うことによる神様からのその約束の祝福は量的には長生きすることであり、質的には人生が豊かに幸になりことを言います。

<2. 親に従う事が正しい理由>

今日聖書本文に戻りまして、エペソ人への手紙6章1節に“子供たちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。”と言われました。これがなぜ正しいですか。創造主である神様はこの世の親の心に子供たちを守ろうとしている本能を許されました。なので子供が親の言うことを聞くことは正しいのです。ここで、従うという単語は“聞く”という言葉から出た言葉です。よく親が子供たちに“ママ(もしくはパパ)の言うことを聞いて。あるいはちょっと聞いてじょうだい”とよく言われますが、その時の親の心は子供を守るための動機から出る言葉だということです。ですから子供が親の言われる言葉に従うことは自然の純理であり、常識的な原則となります。

これは人間の世界だけではなく、動物世界においても一般的な原則として通じていることでしょう。お母さんの雌の動物は生まれたばかりの子をやしない、えさを与え、守ります。そして子の歩きと走り、或いは飛ぶことやたたかうことなどを教えます。このように幼くて、弱い子の動物は必要な保護と助けと教育をお母さんの雌の動物から教わります。ですから動物の世界でも同じく子がお母さんの言うことを聞いて従うことは生存のために大切なことなのです。ですから親に対する従順は自然秩序の規範として、生存の法則としてでも尊重されるべきです。

子供たちになるみなさん、よく考えて見て下さい。我々は3歳以前の記憶がほとんどありません。というのは生まれても、何の力もなく、自力(じりき)で生きることができない時があったのにもかかわらず、今こうして自分が大きくなったのは親の保護と愛のためではなかったでしょうか。

愛するみなさん! 昔から我々の先祖たちから人間の中でこの世の中一番おろかで、恩知らず人はどんな人だと言われているのかご存知ですか。それは、いまの自分が自分になれたのは母や父の助けと愛と恵み、恩のおかげであることを忘れ、感謝もせず、人ではないでしょうか。このくらいは動物さえも知っている事実です。親に従順しない人だと言われているのではないのでしょうか。そういうわけで、昔から、先祖たちは親を敬わない不孝の子供たちに対して厳しくよく獣よりも劣る者だとしかつたのではありませんか。

＜3. 親を敬うことと伴う祝福の約束は？親の存在だけでも大事にし、尊重することです。＞

そして、今日の聖書の本文エペソ人への手紙6章2節を読んで見ると、“「あなたの父と母を敬え。」これが第一の戒めであり、約束を伴ったものです。”と言われました。今日の御言葉によると“約束を伴った戒め”だと言われています。神様から与えられた十戒の中でほかの戒めにはなく、この戒めだけに与えられている祝福の約束です。出エジプト20章12節を共にもう一度読んで見ましょう。[あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。]そして本文エペソ人への手紙6章3節にも、“「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。”と言われました。

申命記5：16でも「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。それは、あなたの齢が長くなるため、また、あなたの神、主があたえようとしておられる地で、しあわせになるためである。」親を敬いながら生きることが私たちに心身が健康で守られ、家庭が幸せになれるという約束ある命令であることが分かります。

注目すべきところは、聖書のどこにもどんなお母さんやお父さんを敬い、従うべきなのかについての条件的な内容が書いてない事とかならず従う子供たちの人生には神の祝福が確実に約束されているということです。親が足りなくても、弱くても、金がなくても、病気の時であっても、過ちがあっても、悪いことをしてしまったとしてもただあなたの親であるならば、あなたは敬うべきであるという事です。それには何の条件もありません！

この命令の中で、“敬う”という単語はヘブル語で、‘カベッド(kabhed)’ですが、“重んずる、重く、大事に置く”という意味で 親の存在だけでも大事にし、尊重することを意味します。親の価値を大切にするという意味です。これは人間的な倫理基準より越える心で親を大切に思いつつ愛と尊敬で仕える態度を教えています。親は私たちがこの世に生まれてきて出会う初めての人間として彼らへの正しい態度を通してすべての人間に対する正しい態度、究極的には神様に対する正しい態度を学ばされます。今日大体の人間関係において失敗をくりかえしている人々、もしくは神様を信頼しきれない人々を見ると、実は親との歪曲された関係、いやされてない親との傷が心の奥底にある場合が多くあることがわかります。

神の法則としての親に敬うことは親だから仕方なく従う程度の従順ではなく、親の存在！親の存在自体を大切に、尊重するほどの従順さであるべきだということです。敬うことは仕方なくすることではありません。いやいやしながらすることではありません。心から父と母の存在だけでも感謝し、尊重し仕える姿勢を言います。ですから、愛するみなさん！お父さん、お母さんを敬うこと、従うことは結局親のためより子供の自分の幸せと祝福のためのごとになることを忘れてはいけません。

＜4. 愛するお母さん方々へ＞

特に愛する信仰の家族のみなさん！今日母の日感謝礼拝を捧げながら、聖書の中では信仰にあってイエス様の母マリアが弟子たちの母になったように、自分の肉体の母だけではなく、信仰にあって今一緒に座っていらっしゃるすべての母たちが自分の母にもなることを強いて聖書では教えています。みなさんの肉体の親と母にももちろんですが、毎週教会で会っている主にあつて母たちにも真心をこめて敬うように心かけてください。特にマリヤ会のお母さんたちの存在を大切に、愛でよく仕えるように頑張ってください。これがみなさんの人生がよくなり祝福される近道であり、秘訣であることを決して忘れないでください。

母の日を迎えて母なる方々にもお願いします。旧約聖書サムエル記第一1章1-11節に出てくるハンナのように、貧しくても大丈夫です。健康でなくても大丈夫です。たくさん教育を受けなくても大丈夫です。知らないことが多くても大丈夫です。しかし、くれぐれも祈りの母たちになってください。母なるハンナの家庭にも深刻な問題がありました。信仰を持っていたお母さんハンナは祈りをもって関わっている問題を解決していただく姿を我々は聖書を通してみることが出来ます。祈る母になってください。子供の将来のために、家族のために、自分のために、祈りをもって家庭を守る母になった時、家庭は平安で守られます。我々の 家庭に、そして我々の子供に問題が訪れるときがあります。そのたびにみなさんはだれに行きますか。だれに頼っていますか。お母さんハンナは家庭の問題を神様の御前に持っていきました。人に頼らないで、神様に出て来て祈る中ですべての問題がついに解決されることを経験する信仰の母、祈りの母たちになりますように切に祈り、祝福します。

今日信仰を持っているお母さんたちはみんな聖書の御言葉が最も大切であり、祝福される神の御言葉であることは信じますと言いながら、実際の生活の中では子供たちに御言葉を教えないし、御言葉通りに子供たちが生きるより、親の自分の教育観、価値観、願い通りに育ち、教えようとする時がどれほど多いのでしょうか。

ここにもう一人のお母さんを紹介します。この母は子どもがなんと19人もいました。当然自分の時間なんか作ることすらできなかった母でした。しかし、このお母さんには子どもたちに対するビジョンと夢がありました。“私はこの19人の子ども全員を時代を揺り動かす神様の子として育てたい。幼いころから神様の御言葉をしっかり覚え、

御言葉を実践する子として育てたい。そして彼らは自分たちのいる場所から神様に栄光をささげて生きるように育てたい。”これがこの母の夢であり、祈りの課題でした。このためにこのお母さんは毎日子どもに聖書を教え、ともに祈り、祈りを教えました。神様の栄光のために生きようとするこの偉大な夢を子どもたちに植えさせました。このお母さんはいつも家庭は地球上神様が立たせた一番偉大な学校だと信じ、この言葉を残しました。“私の子どもの教育を学校にだけゆだねることはしない。私の涙と祈りと手のあかがついているわたしの聖書をもって子どもを育てよう。”このような母をとおして育てられた19人の子どもたちが偉大な指導者にならないわけがありません。子どもの中にはイギリスに一番の影響を与えた霊的指導者であるジョンウェスレ(John Wesley)がいるし、賛美歌の数々の曲を作詞したチャルスウェスレ(Charles Wesley), そのほかすべての兄弟たちも美しく真実な人生を送りました。このお母さんはスザンナー(Susannah)でした。

メッセージを終わらせます。ドイツの宗教改革者であるマルティンルターはこう言いました。“**親はこの世に遣わされている神様の代理者だちだ。**”と教えました。今日も私たちをお造りになった創造主の神様が我々に命令されています。“**あなたの親に従うだけではなく、親を敬いなさい。**”と。この御言葉を固く信じて従順しているうちにみなさんの家庭がさらに祝福され、幸せになり、家族関係が回復され、みんな健康で生きるため神様があらかじめ定め、与えようとする約束の祝福をいただくクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさんとなりますようにイエスキリストの尊い御名によってお祈り申し上げます。アーメン！